

松村康平先生を偲んで

佐藤 啓子（文教大学）

松村康平先生は、2003年11月19日に86歳でその生涯を閉じられました。

「松村康平先生追悼の集い」が、日本関係学会、日本心理劇協会と学校法人新生学園鶯谷さくら幼稚園の主催により、2004年2月15日、六本木の国際文化会館で開催されました。会場の中央に、美しい花々に囲まれて先生の写真が飾られ、その花の中には先生がかつて、元 義宮様（現 常陸宮様）の傳育官をなさったというご関係から、天皇陛下、皇后陛下と常陸宮家からのお花も飾られていました。全国から集まった200余名の参加者が、在りし日の先生を偲び、ご冥福をお祈りしました。

先生の略歴や研究活動歴については、その折配布された詳しく正確な資料がありますので、作成者：土屋明美氏のご了解を得、その一部抜粋を文末に添付させて頂きました。

この資料からも、先生は実に幅広く多彩な活動を続けてこられたことがわかります。

私が本稿執筆の依頼を受けたのは、おそらく私が先生から直接教えを受けた者であり、また松村先生からのご推薦によって本学会の理事をしている関係ではないかと思っておりますので、ここでは特に、私の存知あげている先生の日常生活場面や教育場面でのお人柄をご紹介します。改めて追悼いたしたいと思います。

1. 厳しくそして優しくした教育者としての先生

私が学生のころ、先生は卒業論文指導の合間に、よく私たちが昼食や夕食に誘ってくださり、研究上の話ばかりでなく、ご自身の若かったころのこと、ご両親のこと、ご家族のこと、経営されていた幼稚園のこと、時事問題への先生のご意見などをお話してくださいました。時々指導内容に触れられた折、私が調子に乗って自分の考えを述べて譲らずに言い張ると、「それは自分には通用しても、社会には通用しない」などと、厳しく戒められたこともあり、常に、社会や未来を見通した中で研究者としての姿勢を養成してくださいました。また、先生はいつも私たちを一人の人間として尊重し、生きたふれあいを通して、対等の人間関係が感じられるように配慮してくださいました。最初は緊張していた私たちも、いつしかそんな関係に慣れ親しみ、つい「そのようなことは生活の中でわかっています。」などと言うものなら、その場にいたたまれないほど、厳しく叱られました。そして、多くの場合、先生は何故私たちが叱られているのかという解答を、すぐには与えてくださいませんでした。何回も自らの行動を振り返り、それでもわからないと先輩に尋ねたりして、謎解きのような解答をやっと見つけて先生に伝えにいくと、先生はニコニコして、「分かればいい」とおっしゃるのでした。

こうして何度か叱られる日が重なり、自分が惨めに思えてしょんぼりしていると、その回復の仕方も心得ていらっしやるのでした。例によって私がしょんぼりしていると、先生は「ちょっと、こっちへ来てご覧なさい。夕陽がとってもきれいですよ。」と誘われるので近くまで行ってみますと、指差される西の空に、薄紫色にたな



在りし日の松村先生
1993年7月25日

びく雲の合間から、赤い大きな夕陽とその光が燦然と輝いているのです。しばし、先生とご一緒に並んでその光景を見ているうちに、私のこころもいつしか解き放たれていくことを身をもって感じることができましたし、先生と眺めた美しかった夏の夕暮れ時の風景は、40年たっても鮮やかに思い出すことができるくらいなのです。先生は、厳しさと優しさとを、同時に兼ね備えていらした教育者でした。

私たちは、先生は指導教官であると同時に、一人の人間として尊敬し、好感を抱き、信頼しました。先生も私たちを大切にしてくださっていることがよく分かりました。厳しさとやさしさを基盤に据えながら、学生一人ひとりの特徴をすばやく捉えては集団や社会に活かしてくださった先生でした。

2. 国際人としての先生

先生はモスクワ、アルゼンチン、ミラノ、ウルグアイ等々世界のさまざまな国々で開催された国際学会でさまざまな研究発表やワークショップを主催されています。

私が最初に国際学会へ先生と一緒に参加できたのは1986(昭和61)年、今は分割されてしまいましたが、元ユーゴスラヴィアのザグレブで開催された第9回国際集団心理療法学会でした。私にとっては初めての国際学会ということもあって、緊張しっぱなしで心のゆとりもなく、右往左往しながらまごまごしていたのですが、そんな私たちに少しでも楽しい体験をという思いがあつてのことでしょうか、ザグレブから国内線の飛行機で約1時間ほどのところに、ドゥブロニクというそれはそれは美しい海岸のリゾート地へ一緒する機会に恵まれました。松村先生の関係者は約10人ほどの参加でしたが、どういうわけか、一緒したのは先生を含め、3名だけでした。

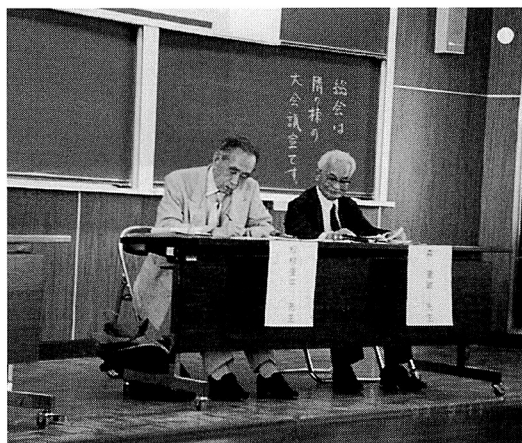
ドゥブロニクに着いて、車や徒歩でアドリブ海沿岸を中心にあちこちを見て回ったのですが、あるときふと気がつく横に並んでいらした先生が、やたらに胸を張って、背筋をぴんと立てて歩いていらっしゃるのです。不自然に思われるくらいでしたので、そのことについて私が尋ねますと、「背中を丸めて歩いていては、日本人としての印象が良くないでしょう。」と言われました。風景を見たり、建物を見たり、行き交う異国のの人々に関心を寄せることのみに注意を払っていた私は、そのとき、世界の中の日本人の一人としての自分自身の存在を、忘れていたことに気づいたのでした。

「関係学」創始者としての先生は、その理論の根本である自己・人・物の共存を世界のどこに居ても、どんな時でも、さりげなく実行し、さりげなく周囲に気づかせるのでした。

国際人としてのご活躍の中に、国際性という大きな枠組みを尊重しつつも、その中に呑み尽くされることなく、自己の尊厳を常に見失わずに行動し続けられた先生でした。

3. 永続的平和を希求し続けた先生

このように、先生は学問や研究の世界と身近な日常生活とが離れることなく、常に「生活即研究即学習」という態度で臨まれ、実践の学としての体系化にご尽力されていらっしゃいました。3者関係的発想を基本とする関係学の体系化はその極みであり、その目指すところは永続的世界平和の実現にありました。本学会において開催されたシンポジウムにおいて話題提供された「平和のための『関係』心理学」(応用心理研究特集, 法政大学出版局, 1967)においても、心理学者としての立場から、平和を実現するためのさまざまな提言をされていらっしゃいます。平和といっても、国際紛争の解決といった国家間の問題のみならず、こころの平和や家族・小集団等の身近な生活者の次元を含めた総括的な平和を課題としていらっしゃいました。それは、対立する2者間においては発展がもたらされないとの立場を強調され、第



日本応用心理学会第60回大会でのシンポジストとして

3 者の介在を重要視されるものでした。決して特定個人や特定集団の犠牲の上に成り立つものであってはならず、時間をかけてでも丁寧に 3 者間がかかわり続ける意味を強調されています。

今日、私たちの生きる現代社会においては、正に多くの子どもたちや名もない家族の命や生活が犠牲にされている現実が進行しています。

今頃きっと先生は、天国でこうした事態を憂いながらも諦めず、3 者関係的に展開する世界平和の実現を、さらには本学会のますますの発展を、強く望んでいらっしゃるでしょう。

4. 先生の遺志を活かして

述べたいことは、まだまだたくさんあります。先生は、教育や研究はもとより、個人・集団・地域・社会・国際関係に至るさまざまな次元において、多彩な活動・実践・提言等をしてこられました。こうした活動が、継続的に継承されながら実現されるよう、継承者の一人として地道な努力を続けたいと思っています。

〈付〉 松村康平先生追悼の集い（2004 年 5 月 15 日（日）会場：国際文化会館）

配布資料（作成者：土屋明美）より



故 松村康平先生 略歴

1917 年（大正 6 年）6 月 17 日～2003 年（平成 15 年）11 月 19 日

出身地 東京都千代田区一番町

〈学 歴〉

昭和 5 年 学習院中等科入学

昭和 9 年 学習院中等科第 4 学年修了，同高等科文科乙類入学

昭和 13 年 4 月 東京帝国大学文学部心理学科入学

16 年 3 月 同大学卒業 同大学院入学 17 年応召 19 年退学